

*答えは解答题紙に書きなさい。

次の——線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- 1 布をはさみでタつ。
- 2 書類がサンセキする。
- 3 折れた骨を病院でツいでもらう。
- 4 リコウな犬。
- 5 多くの月日をツイやす。
- 6 さいふをヒロう。
- 7 かきの実が熟れて、秋が深くなった。
- 8 新しい服を早速着てみる。
- 9 敵かな式典。
- 10 今のところ、専らテニスをやっています。

次の□にそれぞれ体の部分を表す漢字一字を入れて慣用句を完成させると、一つだけ他と異なる漢字が入るものがあります。それを選び、記号と入る漢字を答えなさい。

(例)

ア	歯	を	食	い	し	ば	る
イ	首	を	長	く	す	る	
ウ	首	を	つ	つ	こ	む	
エ	首	を	か	し	げ	る	

(答え) 記号：・ア 漢字：・歯

1	ア	を	そ	ろ	え	る
イ	を	す	ま	す		
ウ	を	焼	く			
エ	を	か	た	む	け	る

2	ア	を	皿	に	す	る
イ	を	と	が	ら	せ	る
ウ	を	見	張	る		
エ	を	丸	く	す	る	

3	ア	が	立	つ		
イ	が	売	れ	る		
ウ	が	広	い			
エ	が	棒	に	な	る	

4	ア	を	ま	く			
イ	を	な	で	お	ろ	す	
ウ	を	は	ず	ま	せ	る	
エ	を	と	き	め	か	せ	る

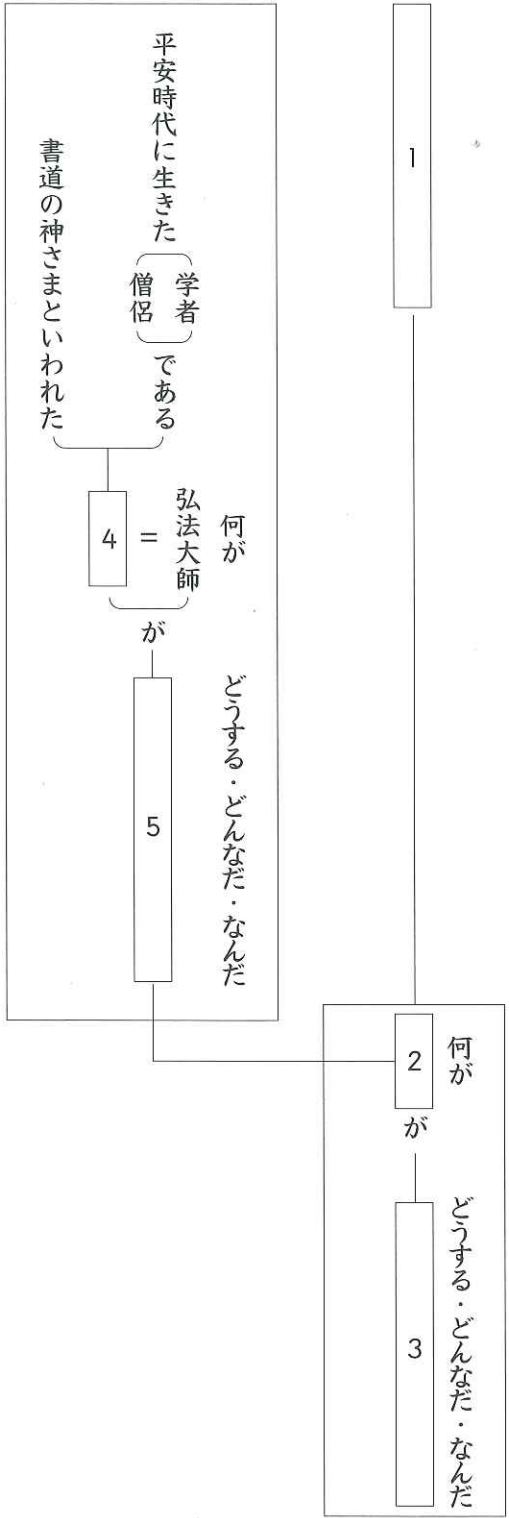
三

次の文を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)
家のそばには平安時代に生きた学者であり、僧侶であり、書道の神さまといわれた空海、後の弘法大師が植えた御霊杉がそびえている。

(注) *1 僧侶：おぼろさん。 *2 御霊杉：スギの木。(那須田稔『天馬のように走れ 書聖・川村驥山物語』)

問一

右の文を図式化した1、5に入る言葉を文中から書きぬきなさい。



問二

右の文に出てきた「弘法大師」にまつわる次のことわざの□には同じ言葉が入ります。その言葉を漢字で答えなさい。
・弘法 □ を選ばず
・弘法にも □ のあやまり

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。(設問の都合上、本文を一部改変しています。)

光輝は、まだ母親のおなかの中にいるときに父親が亡くなってしまい、母とずっと二人暮らしをしていた。ある夏、母の仕事の都合で引越しをしなければならなくなったが、今ようやく学校が楽しくなってきたところなので転校したくない。実は母が高校を卒業後、家を出たために、会うことのなくなっていた祖父の家が同じ学区内にある。そこに住めば転校しなくてもよいということで、光輝は祖父といっしょに暮らし始めていた。

台所にかかっている、タクシー会社のカレンダーを一枚めくると、青い空と白い雲の下に鮮やかな紫色のラベンダー畑が広がっていた。

「あっ」

今日、八月一日の日に丸印がしてある。

「おめでどう」

ぼくはびっくりしていた。まさかおじいさんがぼくの誕生日を知っているなんて。カレンダーに丸印がつけてあるなんて。

おじいさんが、ぼくの頭に手を置いた。ぼくはあたふたと「はい」などと答えた。ばかみたいだ。

「十一か」

ぼくはうなずいた。

「十一年前なんて、わしにとっては最近の話だっていうのに、子どもっていうのはすごいもんだな」

おじいさんはそんなことを、ぼくにというより、むしろ自分に言うみたいにならずらと言うから、ぼくはまたぼんやりとうなずいた。

「今日は伸子が来るらしいぞ」

え？

おじいさんは、ぎゅっとひとつ笑って、そのまま行ってしまった。

母さんが来る。母さんがこの家に来るんだ。ぼくは単純にうれしかった。おじいさんのうちに引越してから、まだ間もなかったから、それほど恋しさはなかったけど、母さんに会えるのはやっぱりうれしかった。

母さんと離れて暮らすことにたくさんさんの心配はあったけど、思っていたよりも気持ちは落ち着いていたし、不安に思うこともほとんど

どなかった。母さんがここにいてくれれば、と思うことはあったけど、ついこないだまでの母さんとの二人きりの生活に戻りたいとは、もはや思わなかった。

ぼくは自分で意識しないうちに、おじいさんという、母さん以外の身内の存在をとて心強く思っていた。母さんがいなくなったらどうしよう、というぼくの最大の心配事は杞憂だった。ぼくにはおじいさんがいた。そして、今は離れているけど母さんもいるのだ。

二人いれば大丈夫なんだ、という根拠のない自信はぼくを元気にさせてくれた。

「行ってくる」

と言って、おじいさんが仕事に行ったあと、ぼくはいつものように廊下の雑巾がけをはじめた。今日も暑くなりそうだな、と思う。誕生日。毎年思うことだけど、ぼくが八月一日生まれというのはとても不似合いのような気がする。夏の誕生日の子たちは、明るくて元気で活発というイメージだな、なんて自分のことを棚にあげて思ったりする。

ギィという耳慣れた音がした。ぼくは高い位置にあった尻を落とし、正座のような格好になって、ふと木戸のほうを見た。黒い日傘をすぼめ、少しかがんで、その人は入ってきた。

「光輝」

母さんだった。

このときの場面を、ぼくはとても鮮明に覚えている。映画か何かのワンシーンをしているように、ぼくは、ぼくを含めた広縁と庭と木戸と母さんを少し離れた場所から、静かな気持ちで眺めていた。

「陽に焼けたわね」

ぼくを見て、母さんは笑った。ぼくの心の中はとても静かだった。まだほんのわずかの時間だけど、母さんと離れたのははじめてだったし、生まれてから一度も、母さんと離れて泊まることすらなかった。それなのに、久しぶりに会った母さんを見て、ぼくの心はなぜか静かだった。

「元気にしてる？」

母さんは広縁に腰かけて、折りたたみ式の日傘を丁寧にたたみはじめた。なんだかちがう人みたいだった。母さんはぼくの知らない白いワンピースを着て、ぼくの知らない白いサンダルをはいていた。

「うん」

と返事をして、ぼくの心はひんやりとした。ぼくの考えていた再会(といっておおげさだけど)とちがっていた。ちがっていたのはぼくの気持ちで、ぼくはもっと喜んでうれしがるはずなのに、と残念に思った。

「母さんは元気だった？」
「うん、まあまあかな」

と、ここではじめておたがいの目を合わせたと思う。「麦茶をいれてくる」と言って、ぼくは手に持っていた雑巾をかたづけ、台所へ行った。涼しい家の中から、縁側に座っている母さんの後ろ姿を見ると、それこそ、ぜんぜん知らない人に見えた。

「はい」

お盆に載せたふたつのコップから、母さんはひとつを手にとって、静かに口をつけた。

「ああ、おいしいわ。ありがとう」

ぼくも飲んだ。すっかりこの麦茶の味に慣れてしまった。母さんと二人で住んでいたときの麦茶の味はもう思い出せなかった。

「この暮らしはどう？」

いつのまにか、手を膝に置いて正座をしていた自分に気づいて、あわてて縁側に足を下ろして、母さんの隣に座った。

「うん、たのしいよ」

「おじいさんはよくしてくれる？」

「うん」

そう、よかった、と母さんは言った。

「これ、ケーキ。すぐおいしいって評判のお店で買ったのよ。あとで食べましょう」

ぼくは母さんからケーキを受け取り、当然のようにそれを冷蔵庫にしまった。冷蔵庫の中はケーキの箱を入れる隙間がなかったから、ぼくは、ラップがかかっている漬物やハムのお皿をどけて、瓶詰のらっきょうや紅しょうがを整理して、納豆のパックをかたづけ、ケーキのためのスペースを作った。その作業をしながらなんとなく違和感が残った。その違和感に気づいたのは、おじいさんが帰ってきてからだだった。

「ただいま」

おじいさんは昼過ぎに帰ってきた。母さんを見て、眉毛を一瞬だけびくつとさせ、「ああ」と言った。
「おじやましてます」

母さんはゆっくりとした動作で頭を下げた。ん？ と思った。おじやましてます？ 何かおかしい。

ああ、そうか。ようやく合点がいった。母さんは、このうちの人ではないんだ、と。そして、ぼくはこのうちの子になったんだと。このうちの子だから、お客さんには麦茶を出すし、お客さんから頂いたケーキは冷蔵庫内にかたづけしてしまう。お客さんだから、「お

じやましてます」と言うのだと。

ぼくはそれを普通に受け入れている自分が不思議だった。たったこれだけの期間で、ぼくはもうこのうちの子になってしまったんだ、と複雑な気持ちだった。

夕食にはお寿司をとって、三人で食べた。ぼくはなぜか緊張してしまい、大好きなタコとマグロもあまり食べられなかった。それは、母さんもおじいさんも同じだったみたいで、三人で囲む食卓は、なんていうのか、ちぐはぐな感じだった。

夏の夜ははじまりが遅くて、空はまだ明るさを残している。ぼくたちは寿司桶の前に、間をもたすために幾度となく外を見たりした。襖を開けたままにしてあるから、台所から居間、縁側、その先の庭まで全部見渡せる。

木戸の上に、夏の夕暮れ色の空が五センチほど見える。ほかのだから遠くからぼくらを見たら、そっくりな親子たち、だと言うだろう。ぼくたちは、寿司をひとつつまんで咀嚼して、ひと息ついてお茶を飲み、外を見る。三人同じタイミングで、その動作をくりかえしている。

「今日は母さん、泊まっていくの？」

ぼくは無邪気を装って、そう質問した。母さんが泊まったら泊まったで、また気づまりになるなあ、と多少思いながら。

「ごめんさいね、光輝。今日はどうしても帰らなければいけないのよ。また今度ゆっくり来るわ」

母さんは、いかにも申し訳なさそうに言った。泊まっていかれたら困るのに、実際にそう言われると、やっぱりさみしい気もした。

「わかった。また今度ね」

ぼくはそう答えた。

それから、ケーキを食べた。いちごの載ったケーキだ。ぼくの分には、薄いチョコレート板がささって、「ハッピーバースデー」と書かれてあった。

「これね、予約して取っておいてもらったのよ。いつもすぐに売れてしまうらしいの」

静かな宵の口だった。おめでどう、と母さんが言って、ぼくたちはケーキを食べた。このうちには、紅茶なんて洒落たものはなかったから、おじいさんが熱い日本茶を入れてくれた。粉茶で、うんと濃いやつだ。おじいさんは、すぐに売り切れてしまうという小さなケーキを難しい顔で食べながら、濃いお茶を何杯も飲んだ。

空は、ようやく夜の色になった。命短いセミはまだまだ精一杯に鳴いている。ぼくは突然スイカが食べたくなっただけで、ケーキのあとのスイカは反感を買いそうだったから、口に出すのはやめた。

「じゃあ、そろそろ行こうかしら」

母さんがそう言って腰を上げた。とたんに空気を抜かれたように、胸がしぼんだ。まだ帰らないでほしいような、いっしょに帰りたいような気持ちになった。ぼくの視線に気づいたのか、母さんがぼくの頭にそっと手を置いた。

「お父さん、この子をどうぞよろしく願います。お世話をかけます」

母さんは深々と頭を下げた。おじいさんは、面食らったように「あ、ああ」と声にならない声を出した。

「じゃあね、光輝。お腹冷やさないようにね。何かあったらすぐに連絡するのよ」

「うん。母さんも無理しないで、仕事がんばって」

ぼくたちは、バイバイと手を振った。

「心配せんでもいいから」

おじいさんが母さんの背中に声をかけた。母さんは驚いたように振り向いて、微笑んだようにも見えた。

「いつでも来なさい」

おじいさんの言葉に、今度は振り返らないで、母さんはそのまま木戸をくぐっていった。

「なあ、スイカ食べたくないか」

おじいさんがいきなりきいてきた。

「食べたい」

思わず答えた。なんでわかったんだろう、と思いつながら。

「なんだか、ああいう甘いものは合わんな。こう、口の中がさっぱりせん」

そう言っておじいさんは庭に出て、井戸水の水場で冷やしているスイカを持ってきた。

ぼくは台所から、まな板と包丁を取ってきた。おじいさんは慣れた手つきで、まん丸の大きいスイカに包丁を入れた。ぱかっと半分にきれいに割れた。真っ赤な実はいかにもおいしそうで、黒い種がみずみずしい。

ぼくらは、夜の縁側でスイカを食べた。まだまだ熱気が残っていて、スイカの冷たさはのどに気持ちよく、汗ばんだ身体にちょうどよかった。

男同士という感じがした。だから、ついでにおじいさんの真似をして、さりげなくあぐらをかいてみた。おじいさんのように、ささっと塩を振ってみた。まるで、いっぱしの大人になった気分だった。

(椰月美智子『しずかな日々』)

(注)

*1 杞憂…とりこし苦労。

*2 鮮明…鮮やかではっきりしていること。

*3 広縁…はばの広い縁側。

*4 咀嚼…食べ物をよくかみくだくこと。

*5 宵の口…日が暮れて間もないころ。

問一 線部①「子どもってというのはすごいもんだな」とありますが、どういうことですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 子どもという存在のすばらしさに感激している。

イ 子どもと比べることで自分の老いを痛感している。

ウ 子どもの成長の早さにすっかり圧倒されている。

エ 子どもの成長の早さにつくつく感心している。

問二 線部②「ぼくの心はひんやりとした。」とありますが、なぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

ア 誕生日だというのに母からの祝いの言葉がすぐに聞けず残念だったから。

イ 想像していたような気持ちの高ぶりがない自分につかりしたから。

ウ 母がぼくの知らない人のように見え、孤独を強く感じてしまったから。

エ 心配をかけまいと言ったことではあるが、元氣だというのはうそだから。

問三 線部③「違和感」の原因があとになって分かりますが、それはどういうことですか。文中の言葉を用いて四十字以内で答えなさい。

問四

——線部④「三人同じタイミングで、その動作をくりかえしている。」とありますが、なぜですか。その理由として最もふさわしいものを次の中から選び、記号で答えなさい。

- ア 三人はそっくりな親子なので、緊張すると行動や動作が似てしまうから。
 イ 人間というものは緊張すると同じような行動をしてしまうものだから。
 ウ 三人とも緊張していて何を話してよいか分からず、会話がはずまないから。
 エ 三人とも緊張していて、早く食事が終わらないかと思っているから。

問五

母が帰るときに感じた「ぼく」の気持ちを表した、比喩(たとえ)の表現を含んだ一文を探し、はじめの五字を書きぬきなさい。

問六

——線部⑤「大人になった気分だった。」とありますが、どういうことですか。本文全体の内容をふまえて六十字以内で説明しなさい。

問七

~~~~線部⑥⑦は、それぞれ小説の中でどのような物や事として書かれていますか。母さんどの生活を表しているものには

(一)を、おじいさんとの生活を表しているものには(二)を、どちらともいえないものには(三)を解答らんに記入しなさい。

- ⑥ 正座    ⑦ ケーキ    ⑧ お寿司    ⑨ 濃いお茶    ⑩ スイカ

## 五

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。

「A」二枚の写真を想像してほしい。一枚の写真には民家の前に緑の野原が広がり、真ん中に白猫が上半身を見せて座っている。もう一枚の写真は同じ所なのだけれど、コンクリートの広場になっていて、その上に黄色と黒の斜めじまのたる(土工事用)が百個以上も等間隔に並んでいる。前衛美術としても通用しそうな異様な光景だが、立てられた看板にはそっけない文字が並んでいる。

「代替地 部外者の立入を禁ず 東京都」

「B」わたしが実際に写したこの写真の場所は、家の下の100メートル四方ほどの空き地で、立て看板のとおり、もう二十年ほど前から東京都の所有に属している。一枚目の写真の一九九三年当時までは野原のまま放置されていて、わたしの動植物観察のもっとも身近なフィールドでもあった。フィールドノートを繰ってみると、ここで出会った数多くの生物たちの面影が、次々に浮かんでくる。早春のフキノトウから始まる植物たちの開花。空色のオオイヌノフグリ、黄色のセイヨウタンポポ、赤紫のガラスノエンドウ、真夏のヒメジョオン、秋のセイタカアワダチソウ等々のあやなす世界は、訪れるチョウやハチやアブたち、そこを根城にするバッタやカマキリ、気持ちよさそうに雨に打たれるヒキガエル、上空で虫を捕らえるツバメ夫婦や種子を食べにくる野鳥たち、夕闇がおりると舞い始めるアブラコウモリの群れに前述の野良猫も交じっていつもにぎわっていた。

「C」この野原に立つたびにわたしは感じたものだ。自然は喧騒に満ちている、と。これはあながち比喩とはいえない。わたしの限られた聴覚では、鳥の声や虫たちのかすかな羽音しか聞きとれないとしても、他の生物の何倍も鋭い感覚器官は、もっと多くの音を判別しているだろう。たぶんわたしが東京の町を歩く時耳にする音と、同じくらいの量の音を。そこにすむ生物にとっての野原の騒がしさは、人間にとつての町とさほど異なっていないだろう。

「D」ここで動植物を続けて観察しているうちに、気づいたことがいくつもあった。野原という自然を構成している個々の生物の、食物と繁殖への欲求は驚くほどに激しくて、風景の見かけの平和さとは裏腹にしじゅう小競り合いを起している。でもその結果、一種だけの生物が全体を占拠してしまうことはありえず、多種類の生物が共存する多様性を表すことになる。放置された空き地が草ぼうぼうになり乱雑な印象を示すのは、自然のなりゆきだ。□は環境の豊かさの証明なのだが、整頓、清潔好きの人にとっては、がまんのないことらしい。わたしのフィールドにあった野原にコンクリートが張られた理由もそれだった。ちなみにハデハデの工事

用のたるは、子どもたちの空き地への侵入を妨害するために置かれた。

「E」ある日ふいに野原が消え、当然のことながらそこに依存していた生物がすべていなくなった時、わたしは親友を失ったような気持ちを感じた。少なくとも野原は東京の町中であって、コンクリートの広場よりもずっと違和感のない存在であったから。

「F」隠された秘密という大げさだが、案外、都市というものは内側に自然性を秘めているのではないか、と思う。自然派をもって任じているわたし自身が、車の騒音がたまらない、空気が悪くてのどが痛いかこぼしながら、もう四十年近く東京で暮らしている。もちろん野生生物の生息地が日に日に減少していくことに腹を立てるけれど、今すぐ他の地方に移住するよりはここにどどまって食い止めた、と願っている。

「G」わたしが小説を書くのは、ふしぎにしておもしろい人間という生物に引かれていてからだ。都市には大勢の、いろいろな人々が集まっている。個性的で開放的な人と会ったり話をする機会も多いし、街を歩く人間を観察するだけでもなかなか楽しめる。また都市

には昼間の顔に対して夜の顔もある。変化に富んで飽きることがない。異質の文化や価値観が互いにかかりつつ共存できるのも都市の特徴である。わたしにとって快いこのような多様性は、自然の本性でもあった。野原ではさまざまな生物の関係が交錯し、全体的に生へと向かうエネルギーが渦巻いていた。都市にもそれと似た熱っぽさがある。

「H」都市が自然性を秘めている理由は、そこに住む人間が生物だからである。わたしたちは野の鳥や獣や虫や花と同等の動物なのである。ハチが作ったりっぱな巣を非自然であるとはだれも言わない。生物らしいということは、人間であることの徴（しるし）でもある。でも他の生物と妥協できなくなれば、都市は自然ではなくなり、無機質な人工ランドになる。街角でキラキラするペットボトルは既にその傾向を示している。

「I」一年後の春、もと野原だったコンクリートを割って、緑のマグマのように草の葉が噴き出した。尽きない自然の回復力を、わたしたちに伝えようとしているようであった。

（加藤幸子『鳥のことは 人のことは』）

（注） \*1 前衛美術：とても新しい手法を用いた美術。

\*2 フィールド：実地に調査する野原。

\*3 喧騒：騒がしき。

\*4 無機的：生命の感じられない様子。

\*5 キラキラするペットボトル：野良猫などを寄せ付けられないように水を入れて置いた

ペットボトル。 \*6 マグマ：地下に生じる高温でとけた状態の岩の物質。

問一 線部①「自然は喧騒に満ちている」とありますが、どういうことですか。次の中から最もふさわしいものを選び、記号で答えなさい。

ア 鋭い聴覚を持つ人ならば、野原にすむ虫たちのかすかな羽音も騒がしく感じるといこと。

イ 野原には花を求めて集まるチョウやハチ、そこを根城にする小動物がたくさんすんでいてにぎやかだといこと。

ウ 野原ではたくさんの生物が生きており、そこに暮らすさまざまな小動物が都会並みの騒音を出しているといこと。

エ そこにすむ生物にとって野原の騒がしきは、人間が町で感じる騒がしきと同じだといこと。

オ 人間より鋭い聴覚を持つ生物にとって、野原のある東京は騒音に満ちているといこと。

問二 段落「A」から「E」を読んで、次の中から、本文の内容と合っているものを二つ選び、記号で答えなさい。ア 筆者は野原にすむたくさんの動物は、お互いに平和を守って共存していると考えている。

イ 筆者は空き地は放っておくと草がぼうぼうになるのは、さまざまな生物が生きていく上で当然のなりゆきだと考えている。

ウ 筆者は都市は自然性を秘めており、野原にコンクリートが張られても、違和感は感じられないと思っている。

エ 筆者は自然界では多くの生物が争うことによって、多種類の生物が生存できると考えている。

オ 筆者は野原にコンクリートを張った人たちは、野原の環境よりも子供たちの安全を大切に考えたのだろうと思っている。

問三  にふさわしい言葉を、文中から選んで書きぬきなさい。

問四 線部②「都市というものは内側に自然性を秘めている」とありますが、どういうことですか。六十字以内で答えなさい。

問五 線部③「人間という生物」とありますが、筆者は人間はどのような存在だと考えていますか。段落「G」から「I」の文中から十五字で書きぬきなさい。

問六 線部④「街角でキラキラするペットボトルは既にその傾向を示している。」とありますが、どういうことですか。本文全体の内容をふまえて説明しなさい。

問七 次の中から、本文の構成（話の進め方）と合っているものを一つ選び、記号で答えなさい。

ア 筆者は前半ですでになくなった野原の生物を思い出し、後半で都市も野原に見られた自然の本性があることを述べている。

イ 筆者は前半で失われた野原の生物たちの面影を述べ、後半で都市もまた都市らしさを失いつつあることを気にかけている。

ウ 筆者は前半で野原にすむ多くの動植物を具体的にあげ、後半では都会における多様な価値観や文化を具体的にとりあげて述べている。

エ 筆者は前半で自然界の生物が争いながら共存していることの重要性を述べ、後半では人間と他の生物が妥協しつつ都市で共存していることを述べている。

オ 筆者は前半で人間によって都市から自然が失われたことを述べながら、後半で都市に自然が回復してきつつあることを述べている。